



宗門の危機突破を願い、全国の代表者が結集した1976年4月15日の「宗門危機突破全国代表者決起集会」

そのように見てくると、同朋会運動が展開されたから教団問題が惹起したのではなく、教団問題が

起きるような封建閉鎖的に形骸化された宗門が現存していたればこそ、同朋会運動が展開されたのである」と「訓覇信雄論集」のなかで述べている。



明治の御同行のバイタリティを感じ、屋根では古い瓦と新しい瓦の違いに感動しました。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌
お待ち受け総上山
▼一日参拝 3月▲
3/30
第9組 眞雄寺
14名

教団の伝統を守ろうとする保守派との権力争いのように見えるが、教団問題の根源は単に、世俗的な利権や権力争いではなく、真宗と名乗る教団がその本来の純粋なる信仰に立ち帰っていくのか、又は単なる歴史上の遺跡となっていくのか、という大きな危機的岐路にあると、訓覇師は指摘する。

「開申」が出され、教団問題が起きた。元宗務総長能邨英士師は「教団問題が、なぜ起こったか」という大きな危機的岐路にあると、訓覇師は指摘する。

また、寺川俊昭師は『念仏の僧伽を求めて』の中で「教団に混乱が起こつたのは、実は信仰に問題があるからだ、これが唯円大徳の指摘ですね。信仰の純粋さに帰らなければならぬ(中略)そしてこの『歎異抄』の精神こそ、真宗の、殊に大谷派の伝統でございませう。宗祖滅後30年頃唯円が、やがて150年して蓮如上人が、そして600年経つと清沢満之が出てきております。この3人の名が表すものは、一貫して歎異の精神の系譜でしょう。」まさに、真宗大谷派という教団の歴史は「歎異の心」をうけ継いで来た伝統であり、すなわち真宗同朋会運動は、この歎異の心から生まれ、展開してきたに違いないといわれる。

も、この教団問題は一応決着した。しかし、そこに安住し「歎異の心」を見失ったとき、そこにこそ教団の危機があるのではないかと、教団にいろんな事件が起きるのは、なんら危機ではない。教団に危機意識がなくなつたときが、本当の危機だ。」真宗同朋会運動を提唱し、身を据えてこられた訓覇信雄師の言葉をいまこそ聞いていかなければならない。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第56回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すすんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb 検索

真宗同朋会運動50年に向けた運動の再検証。今回は、訓覇信雄、能邨英士、寺川俊昭三師が語る教団問題の本質と同朋会運動展開の必然性について。

また「点描」は引き続き北海道「開教」百年。本号と次号の2回にわたって1994(平成6)年、弥永北海道博物館から発刊された『北海道開拓と東本願寺道路-資料による開拓の歴史』と、その問題を直接指摘した「確認会」。

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 歩み(六) 教団問題から見る真宗同朋会運動 (2)

教化本部 古卿 誠幸

「開申」にはじまる今回の管長問題が一派のなかにおける権力争いのように考えられておりますことは、誠に遺憾であります。問題の根は決してさようなところにございませぬ。問題はさような権力争いではなくして、今後、我々の教団が本来在るべき姿に帰って近代化を完了し、未来に生きぬく方向を開くか、それとも封建の遺制のなかのいのか、いのかという点におきまして、まことに重大な分岐点に立たされているというところであります。



す(『真宗』1969(昭和44)年11月号)と、開申が通達されたその年の10月6日に当時の訓覇宗務総長は述べている。教団問題を表面的な事象だけからみると、莫大な資産価値を持つ東本願寺に対する利権の争いであり、一方では戦後の宗門改革派と、どこまでも法主を中心とする